国語大辞典

国語大辞典

編集　尚学図書

発行　小学館

国語大辞典　定価 八、八〇〇円

昭和五十六年十二月十日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十七年 月十八日 第一版第四刷発行

編集 尚学図書
東京都文京区後楽二丁目一五―一
発行者 相賀徹夫
印刷者 小林清

発行所 株式会社 小学館
東京都千代田区一ツ橋二丁目三―一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八―二〇〇
電話 編集（〇三）八一五―四一六一
製作（〇三）二三〇―五三三三
販売（〇三）二三〇―五七三九

＊造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan　0581-421001-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

発刊にあたって

一冊の中に、できるだけ多くの情報を盛り込もうという企図のもとに、この辞書は編纂された。さいわい先に斯界に迎えられ、活用されつつある『日本国語大辞典』（全二十巻・縮刷版全十巻）があり、その成果の上に立って、この企てははじめて実現したものである。

古語、現代語、専門用語の類、そして主な地名、人名等の固有名詞をも収録し、言葉はもとよりさまざまな分野の事柄を的確に記述し、全一巻の辞書としては、日本で最大規模のものとなった。内容を増やせば、いきおい字は小さくなり、ページ数は増える。そこで、字は小さいが読み易く、ページ数は多いが軽くて使いやすくするということを目指し、印刷および製紙関係者等の協力を得て、国語辞書としては新しいかたちのものとすることができた。

この新しい辞書は『日本国語大辞典』の要約を基礎に、新しい情報を加え、新たな工夫をこらしてまとめられた。従って、本書のなるにあたっては、『日本国語大辞典』（編集・日本大辞典刊行会）のためにご尽力くださった編集顧問、金田一京助・佐伯梅友・新村出・時枝誠記・西尾実・久松潜一・諸橋轍次・山岸徳平の諸先生を始めとする多くの方々の恩恵によるところが多大である。直接編集に当たったのは、尚学図書辞書編集部と言語研究所であるが、『日本国語大辞典』に引き続いて、編集委員をお願いした先生方をはじめ、協力者の方々に心から謝意を表するものである。

この辞書が、広く活用され、読者諸賢の叱正を仰ぎつつ成長していくことを願ってやまない。

昭和五十六年十月

小学館
尚学図書

編集委員
市古貞次
金田一春彦
見坊豪紀
阪倉篤義
中村通夫
西尾光雄
林大
松井栄一
馬淵和夫
三谷栄一
山田巖
吉田精一
（五十音順）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

凡　例

編集の基本

一　この辞典は、全一巻の中にできるだけ多くの情報を収め、日常さまざまの分野で遭遇する言葉や事項に、簡潔にこたえられるように企図したものである。

二　収録する項目は、現代語から、歴史的文献に見られる古語にも及び、地名・人名などの固有名詞、専門用語、時事用語などもとり入れた。

三　「日本国語大辞典」（全二十巻・縮刷版全十巻）を基礎にして項目を選定し、これに新たな項目を補った。収録する項目数は二四五八〇〇余項目になる。

四　語義の説明は、ほぼ時代を追って記述した。特に、異説などある場合は補助注記をもうけて説明した。

五　現代語には作例を補って、意味用法などを明確にするようにつとめた。

六　語源・語史は、現在最も妥当と考えられているものをとりあげたが、断定しにくい場合は、疑問を残すかたちにした。

七　見出しのかたちは、現代かなづかいに準じた。解説文は現代の視点に立って理解しやすいように配慮した。

八　歴史的に著名な姓氏二百余をあげて、その沿革に触れた。

九　図版は、絵巻、図誌、作品のさし絵などから、約二七〇〇点を収めた。

十　漢語を構成する字音の要素を見出しに立てて、同音の漢字が一覧できるようにし、それぞれの漢字の意味と熟語を示した。これに関連して、約六千の漢字について、部首、字画から引ける「漢字表」を巻末に付し、漢和辞典の機能をも備えるように配慮した。また、この表は、常用漢字表を兼ねるものであり、熟字訓の索引としても利用できるように工夫した。

十一　付録として、漢字表のほか、戦後国語施策資料集、万葉がな一覧、方位方角、十干十二支などを収めた。

見出し語

一　見出し語の種類

1　かたちの上から、親見出し（独立の見出し項目）と、その見出しの中にまとめられる子見出し（追い込み項目）とがある。親見出しの大半は、いわゆる単語の類で、やや大きめのゴシック体で示した。

かざり-だけ【飾竹】　**かざり-た-てる**【飾り立てる】

2　子見出し（追い込み項目）には次の三種類がある。

(イ)　親見出し（独立の見出し項目）を句頭に持つ慣用句、ことわざの類。この場合は親見出しと共通の部分には「**|**」を当てて略し、他の部分はやや小さめのゴシック体で示した。

いのち【命】…**|あっての物種**（ものだね）

おを【尾】…**|に鰭**（ひれ）**を付ける**

活用語を句頭に持つ慣用句、ことわざの類の子見出しは、活用語尾から語形を示した。また、語幹と語尾の区別のない動詞については「**|**」で略すことをしないで、全形を示した。

き-る【切る・伐る・斬る…】…**|-って捨てる**

にる【似る】…**に**（似）**たり寄ったり**

みる【見る・看る・視る…】…**み**（見）**ると聞くとは大違い**

(ロ)　かなで四文字以上になる親見出し項目に、さらに他の要素が付加されている複合語の類。この場合は親見出しと共通の部分を「**|**」で代用し、他の部分は親見出しと同じ大きさのゴシック体で示した。

しゃ-かい…クヮイ【社会】…**|-あく**【社会悪】…**|-いがく**【社会医学】…**|-うんどう**【社会運動】…**|-か**…クヮ【社会科】…

(ハ)　姓氏。この場合は姓を独立の見出し項目とし、同姓の人名は姓の部分を「**|**」で代用し、名の部分は親見出しと同じ大きさのゴシック体で示した。

たに【谷】姓氏。**|-じちゅう**【谷時中】…**|-たてき**【谷干城】

たいら　たひら【平】姓氏。**|-の-あつもり**【平敦盛】…**|-の-かげきよ**【平景清】

3　子見出し（追い込み項目）を句頭に持つ慣用句、ことわざの類は、その子見出しのもとに収め、追い込み項目と共通する部分を再出した。

いち-だい【一代】…――-いちど【一代一度】…一代一度の仁王会

4　参照見出し、検索見出しを「＝」「⇩」で指示した。

(イ)　解説や用例などすべてを別の見出しにゆだねる場合は、その見出しのかたちを「⇩」で示した。ただし、語形が同じ場合、⇩親見出し　⇩「-」の子見出し　というかたちをとったものもある。

ひ【日】…――の長(げ)に　⇩親見出し

ひ-の-くち【樋の口】⇩「ひ(樋)」の子見出し

(ロ)　解説のみをゆだね、場合によっては用例が入るようなものは、解説をゆだねた見出しのかたちを「＝」で示した。

せい-かく【醒覚】＝かくせい(覚醒)

二　見出し語の表記

1　和語・漢語はひらがなで示し、外来語はかたかなで示した。

2　和語・漢語については、古語・現代語の別なく、現代かなづかいに準じた。ただし、現代かなづかいで表記しえないものは歴史的かなづかいにより、またまぎらわしいものは歴史的かなづかいの見出しをも立てて、本来の見出しを参照させた。

3　外来語については、現代かなづかいにこだわることなく、長音「-」をもって表わすなど、現在もっとも一般的と思われる表記によった。ただし、「ヴァ ヴィ ヴゥ ヴェ ヴォ」は「バ ビ ブ ベ ボ」、「キェヲ」は「イエオ」、「ヂヅ」は「ジズ」とする。他に慣用的に用いられる語形がある場合は（　）内に示した。

アジア【亜細亜】(Asia)(アジヤ)

バイオリン（英violin)(ヴァイオリン・ヴィオリン)

三　見出しの中に示すかな以外の記号

1　見出しの語の構成を考えて、最後の結合箇所がはっきりするものには、その箇所に「-(ハイフン)」を入れた。ただし、固有名詞には入れない場合が多い。

じ-しん　ヂ…【地震】　　じしん-よち　ヂシン…【地震予知】

いしかり【石狩】　　いしどうまる【石童丸】

2　活用することばには、活用語尾の上に「・」を入れた。ただし、文語シク活用形容詞は、語幹がそのまま終止形であるから、語尾の「し」の上に「。」を入れて、特別であることを示した。

あなずらわ。し　あなづらはし【侮らわし】　うつくし・い【美しい】

四　活用語の見出し

1　動　詞

(イ)　文語形と口語形とが存在するものは、口語形を本見出しとし、文語形を文……の形で示し、統合した。その場合、文語形については必要に応じて参照見出しを立てた。

かんが・う　かんがふ【考う】〔他ハ下二〕⇩かんがえる(考)

かんが・える　かんがへる【考える】〔他ア下一〕文かんが・ふ〔他ハ下二〕

(ロ)　原則として、終止形を見出しとした。

(ハ)　名詞から派生したサ変動詞は、原則としてその名詞の項目に統合した。

2　形　容　詞

(イ)　文語形と口語形とが存在するものは、口語形を本見出しとし、文語形を文……の形で示し、統合した。その場合、文語形については必要に応じて参照見出しを立てた。

かな。し【悲し・哀し・愛し】〔形シク〕⇩かなしい(悲)

かなし・い【悲しい・哀しい・愛しい】〔形口〕文かな。し〔形シク〕

(ロ)　原則として、終止形を見出しとした。

(ハ)　形容詞に接尾語「がる」「げ」「さ」「み」などのついた語は、原則として項目を立てることはしなかったが、本項目の末尾にやや小さめのゴシック体で、その語形と品詞とを示した。

かなし・い【悲しい・哀しい・愛しい】…/かなし-が・る(自他ラ五(四))/かなし-げ(形動)/かなしげ-さ(名)/かなし-さ(名)/

3　形容動詞

(イ)　文語・口語ともに語幹を見出しとした。

(ロ)　形容動詞の語幹と名詞とが同じ形で存在する語については、原則として、

その名詞の項目に統合した。

4　助動詞

文語・口語ともに原則として終止形を見出しとするが、他の活用形で語頭から終止形と一致しないものなどは、必要に応じてその活用形も別に見出しに立てた。

歴史的かなづかい

1　歴史的かなづかいが、見出しのかなづかいと異なるものについては、見出しのすぐ下に、小さめの字で、その歴史的かなづかいを示した。

2　見出しの「ー」および「・。」は、歴史的かなづかいの中では省略した。ただし、歴史的かなづかいによって語幹が明らかになる少数の動詞については、歴史的かなづかいに「・」を入れて示した。

おもい-しず・む おもひしづむ【思い静む・思い鎮む】

そうろう さうらふ【候う】

3　見出しに「ー」のはいるものは、その前後を分けて考え、見出しのかなづかいと歴史的かなづかいが一致する部分は、：によってその部分は省略して示した。追い込み項目もこれに準じた。

おもい-し・る おもひ：【思い知る】

4　和語はひらがな、漢語(字音語)はかたかなで示した。ただし、その区別の決めにくい語のうち、漢字の慣用的表記のあるものは、その漢字の歴史的かなづかいに従う場合もある。

おも・う おもふ【思う】　　**かっ-ぱつ** クワツ：【活発・活潑】

5　字音語のうち、音変化をきたして今日の形になっている語、「観音(クワンオン→クヮンノン→カンノン)」の類、「天皇(テンワウ→テンノウ)」の類、および、「学校(ガクカウ→ガッコウ)」の類は、便宜上それぞれもとのかたちの「クヮンオン・テンワウ・ガクカウ」を、歴史的かなづかいとして示した。

漢字欄

一　漢　字

1　見出しの語に当てられる慣用的な漢字表記のうち主なものを【　】の中に示す。常用漢字表および人名用漢字にある字体は、それらの字体に従った。

2　慣用的な漢字表記が二つ以上考えられる場合、それらを併記するが、その配列は、主として現代の慣用を優先する。その判断を下しがたいものは画数順に従う。

かめ【瓶・甕】　　**か-や**【蚊帳・蚊屋】

3　漢字欄にかなが入らないと不自然と思われるものにはかなを補った。

あか-ちゃん【赤ちゃん】　　**うし-の-はなぎ**【牛の鼻木】

4　見出し語の構成上に外来語の要素が含まれる場合は、外来語の部分に「ー」をあてて示した。

カプラン-すいしゃ【ー水車】　　**カプリ-とう** ：タウ【ー島】

5　いわゆる当て字の類もできるだけ示し、植物などで漢名を当てる慣用のあるものについては、その漢字をも示した。

あじさい あぢさゐ【紫陽花】　　**やぼ**【野暮】

6　かたかな・ひらがな、またはローマ字で書く慣用が固定していて、漢字と熟合するものについては、それらをも含めて示す。

エービ-がた【AB型】　　**エーろく-ばん**【A6判】

7　固有名詞の項目では、書名等の原題を漢字欄に示すこともある。

げんおじ ゲンをぢ【源おぢ】

二　送りがな

1　名詞には、原則として送りがなを入れなかった。

2　活用のある語には、内閣告示「送り仮名の付け方」(昭和四十八年六月十八日)を参考にして、漢字欄に送りがなを入れた。「送り仮名の付け方」における許容の範囲内でできるだけ多く送るようにした。

あらわ・す あらはす【表わす】　　**おこな・う** おこなふ【行なう】

うち-あわ・せる ：あはせる【打ち合わせる】

3　副詞・接続詞の類には、原則としてかなを送った。

かならず【必ず】　　**さら-に**【更に】　　**まったく**【全く】

おおい-に おほい…【大いに】　ただち-に【直ちに】
かつ【且つ】　もしくは【若しくは】

品詞欄

1　見出し語の品詞等の表示は次のようにした。
名詞・固有名詞　品詞の表示を省略した。
代名詞　【代名】
動詞　【自ヵ四】…自動詞カ行四段活用
自動詞・他動詞の区別を、自・他で示し、活用する行とともに活用の種類を次の略号で示す。
四段活用　四（現代語は便宜上 五 と示す）
上一段活用　上一
上二段活用　上二
下一段活用　下一
下二段活用　下二
カ行変格活用　カ変
サ行変格活用　サ変
ナ行変格活用　ナ変
ラ行変格活用　ラ変
形容詞　【形ク】……形容詞ク活用
【形シク】…形容詞シク活用
【形ロ】……形容詞ロ語形活用
形容動詞　【形動】……形容動詞ナリ活用
【形動タリ】…形容動詞タリ活用
【形動ナリ・タリ】…ナリ活用・タリ活用両様あるもの
副詞　【副】
連体詞　【連体】
接続詞　【接続】
感動詞　【感動】
助詞　【格助】……格助詞
【副助】……副助詞
【係助】……係助詞
【接助】……接続助詞
【終助】……終助詞
【間投助】…間投助詞
助動詞　【助動】
接頭語　【接頭】
接尾語　【接尾】……助数詞を含む。
造語要素　【語素】……造語要素としてのはたらきのある和語・外来語
漢字語素　【字音語素】…右に準ずる漢字音の要素
連語　【連語】……親見出しに立てられても単語とみなされないもの
枕詞　枕……品詞に準じて示す。
2　品詞欄に準ずるものとして、次の注記を、語釈の冒頭に加える。
（―する）……それに続く語釈に関して、サ変としての用法も存在することを示す。ただし、その見出し語の語釈すべてについてサ変の用法が認められるものについては、いちいち注記しない。
（形動）（形動タリ）……その語、ないし、それに続く語釈に関して、形容動詞としての用法も存在することを示す。

見出し語の配列

一　親見出しの配列
親見出しは、1かな表記、2品詞別、3和語漢語の別、4漢字表記、の順にそれぞれ一定の配列法に照らして配列した。
1　かな表記による順
(イ)　五十音順
一字めが同じかなのものは二字めのかなの五十音順。二字めのかなも同じものは三字めのかなの五十音順。以下これに従う。この場合、長音符号「ー」は、直前のかなの母音と同じとして考える。

(ロ) 清音→濁音→半濁音の順
(ハ) 小文字が先、大文字が後。すなわち、拗音→直音の順、または促音→直音の順
(ニ) ひらがなが先、かたかなが後。すなわち、和語・漢語→外来語の順

2 品詞による順
(イ) 名詞(固有名詞)→代名詞→動詞→形容詞→形容動詞→副詞→連体詞→接続詞→感動詞→助詞→助動詞→接頭語→接尾語→造語要素→連語→枕詞の順
(ロ) 字音語素は、漢語の先に置く。

3 和語・漢語の別による順
(イ) 和語→漢語の順
(ロ) 和語・漢語の複合しているものは、語頭部分の和語・漢語によって考える。

4 漢字表記による順
(イ) 漢字欄に、漢字が当てられるものが先、漢字が当てられないものが後。
(ロ) 漢字が当てられる場合、その漢字が一字のものが先、二字のものが後。以下これに従う。
(ハ) 同数の漢字が当てられる場合、第一字めの漢字の画数が少ないものが先、その画数が多いものが後。第一字めの画数が同じなら二字めの画数が少ないものが先、画数が多いものが後。以下これに従う。
(ニ) 画数の同じものについては康熙辞典(こうきじてん)の順序による。

5 外来語で、同じかなの見出しは、その語のもとのローマ字つづりのアルファベット順による。ただし、人名は生年順によった。

二　子見出しの配列

子見出しが二つ以上ある場合は、「▌」を当てて示す慣用句、ことわざの類が先、「▌」を当てて示す複合語が後で、それぞれの配列の順は五十音順によった。

語　釈

一　語釈の記述

1 一般的な国語項目については、原則として時代を追って記述した。

2 基本的な用言などは、なるべく根本的な語義を概括してから、細分化して記述した。

3 専門用語・事物名などは、語義の解説を主とするが、必要に応じて事柄の説明にも及ぶ。

二　語釈に用いる分類記号

語義・用法を分ける場合、必要に応じて次の分類記号を用いる。

▌▌……品詞または動詞の自・他の別、活用の種類の別などによって分けるとき

㊀㊁㊂……根本的な語義が大きく展開するとき、漢字の慣用がいちじるしく異なるとき、または、一項にまとめた固有名詞を区別するとき

①②……一般的に語釈を分けるとき

㋑㋺……同一語釈の中で、特に位相・用法の違いなどによってさらに分けるとき

三　語釈冒頭の注記

語釈の冒頭に、必要に応じて次のような注記を(　)内に示した。

1 和語・漢語について
(イ) 語の成り立ち、語源、語史の説明および故事・ことわざの由来など
(ロ) かなづかい・清濁・活用などの問題点
(ハ) 用法の説明、または品詞に準ずる注記

2 外来語について
(イ) その原言語名と、ローマ字での原つづり、または原つづりのローマ字化つづり、および必要に応じてその原義をも示す。
(ロ) 原言語名は、次のような略号を用いる。
英…英語　ドイ…ドイツ語　フラ…フランス語　など
ただし、英語のうち米国語を区別する必要のあるときは アメリカ と示す。
(ハ) 外国語に擬して日本でつくられた語には 洋語 と示し、さらにその語の成り立ちが推測できるものについては、原言語名・原つづりをも注記した。

3 固有名詞について
(イ) 書名・地名などの原表記。外国の書名はその原つづりをローマ字化したつづり
(ロ) 外国人名の原つづりをローマ字化したつづり

四　語釈の末尾に示すもの

語釈の末尾に、必要に応じて次のようなものを示した。

1　同義語は、語釈のあとにつづけて示す。

2　反対語・対語などは、同義語の後に↔を付して注記する。

3　参照項目は、右につづいて→を付して注記する。

4　季題として用いられるものは、すべての語釈が終わったあとに《　》でくくって、新年・春・夏・秋・冬の別を示す。

五　語釈の文章および用字

常用漢字、現代かなづかい等に準じ、現代通用の文章で記述した。

出典・用例・作例

一　採用する出典・用例・作例

1　用例は、上代から近世までの資料から採録し、古い例、語釈のたすけとなるわかりやすい例などを目安とした。

2　一肢に二つ以上の用例を採用した場合、時代の古いものから順次並べた。

3　一語あるいは一肢の用法を明らかにするために、現代文でふつうに想定される用例文、いわゆる作例を補った。この場合、通常の用例と区別するため「　」でくくった。

二　典拠の示し方

1　各出典についておのおの一本を決め、それ以外から採る必要のあるときは、異本の名を冠して示した。ただし、狂言など、すべてについて伝本の名を表示したものもある。

2　いくつかの名称をもつ出典名は一つに統一して示した。ただし、「物語」「日記」「和歌集」等を省略したものもある。

3　巻数・章題・説話番号・歌番号など、必要に応じてできるだけ詳しく示した。

4　幸若・謡曲・狂言・御伽草子などの類や、近世の作品には、なるべくジャンルを冠した。ジャンルは省略した形で示した場合もある。

5　古辞書・随筆などで、その語もしくは語釈の典拠となるような性格のものは〔　〕内に、その書名をあげるにとどめ、用例文は省いた。

用例文

用例は、語釈のあとに＊印をつけて示した。

用例文は「　」でくくり、適宜句読点を加えるなど、できるだけ読みやすくした。ただし、見出しに当たる部分は、なるべく原本の形に従った。

1　見出しに当たる部分の扱い

(イ)　原則として原本のかたちを尊重するが、漢字の字体については次項3による。

(ロ)　万葉がな・ローマ字等はそのまま表記し、適宜（　）内に読みをかたかなで付記した。

(ハ)　見出し部分の漢字について、その読みが原本にあるものには（　）内にかたかなで示した。原本の読みが不確実な場合は、その部分をひらがなで補う場合もある。訓点資料なども、この原則に従った。

(ニ)　原本の行の左右に付された訓注的なものを〈注〉の形で示す場合もある。

(ホ)　拗音・促音・撥音は、確実なものに限って小字とした。

2　見出しに当たる部分以外の扱い

〈表記〉

(イ)　和文は、原則として漢字ひらがな混り文とした。ただし、ローマ字資料や古辞書については、かたかなを使う場合がある。

(ロ)　万葉集・古事記・日本書紀・風土記・古語拾遺・日本霊異記・祝詞・宣命、および訓点資料などは、原則として読み下し文で示した。

(ハ)　漢詩文、およびそれに準ずるものは、できるだけ返り点を付けた。

(ニ)　原本がかな書きでも、読みやすくするために、原文をそこなわない範囲で漢字を当てたものもある。

〈かなづかい〉

(イ)　上代から中世に至る、書写されて受け継がれた作品群は、歴史的かなづかいで統一した。ただし、中世の和文の記録（「御湯殿上日記」など）や狂言・

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

幸若・御伽草子の類は拠ったテキストのかなづかいに従った。

(ロ) 近世の主として印刷されて受け継がれた作品群は、テキストのかなづかいに従った。

(ハ) 漢字の読みを助けるふりがなも右の原則に従う。

(ニ) 拗音・促音・撥音は、確実なものに限って小字とした。

3 漢字の字体について

(イ) 常用漢字表および人名用漢字に含まれる漢字は原則としてその字体に従った。ただし、必要に応じて旧字体を残した部分もある。

(ロ) 常用漢字表および人名用漢字外の漢字については、原則として拠ったテキストの字体を尊重するが、極端な異体字などについては、なるべく普通のかたちを採用した。

4 その他

原本ないしテキストにおける、文字の大小の使い分け、割注の形などは、一行書きとした。この場合、もとの形に準じて ＜ ＞ （ ）〔 〕などを適宜用いて、区別する場合もある。

補助注記

語釈およびそれに伴う解説では十分に述べられない記述や、諸説のある問題点など、補助的注記を 補注 として示した。

字音語素

1 漢語を構成する字音の要素について、漢字ごとにその意味を示し、その漢字で構成される熟語を掲げた。

2 とりあげる漢字は、日本において使われるものを中心にするが、熟語の例は、漢籍に用いられるものにも及ぶ。

3 同じ字音の漢字を一つの見出しのもとに集め、それぞれの漢字について、【 】で包んで漢字欄を子見出しとした。

4 〔字音語素〕の表示の下に、収載するすべての漢字の一覧を掲げた。

あい〔字音語素〕1矣、埃・挨・欸　2愛、愛・曖・靉　3靄、藹・靄

5 漢字は、主として、字形構成上の表音部分によって分類し、表音部分を共通にするものを類として、表音部分の画数によって配列した。共通の表音部分をもたない漢字は、最後に一括して一類とした。

6 表音部分を共通にする漢字の類の中では、原則として画数順に配列した。

7 共通表音部分をもたない漢字の類の中では、総画数によって配列した。

8 熟語は、漢字の意味の区分けごとに、その漢字の熟語構成上の役割から、重畳、対義・類義結合、後部結合、前部結合等を／で区分けして列記した。

【愛】……／愛悪、愛憎、…愛撫／愛育、愛着…／最愛、博愛、…／愛妻、愛児…愛人／

9 漢字欄には、常用漢字については、その字体を示し、下に＝を付して旧字体をも示した。

【間＝閒】　【観＝觀】

10 漢字欄の下に、その見出しとした音の呉音・漢音・唐宋音・慣用音の別をそれぞれの略号で示した。但し、呉音・漢音が同音のものについては省略した。

【函】漢　【甲】慣

11 漢字欄の下に、歴史的かなづかいを示した。

【貫】クワン　【方】ハウ

12 その漢字の別音を別の字音語素として掲げるときは〔↓……呉〕のように、また、一般語に、その字音が独立して語をなすものを名詞等として掲げるものがあるときは、それぞれ、⇩を用いて参照すべきことを示した。

【豊＝豐】漢 ①……⑤「豊臣（とよとみ）氏」の略。／織豊時代／〔↓ブ 慣〕

⇩ほう（豊）

図　版

1 風俗・服飾・有職・調度・図像・仏具などについて、絵巻・図誌あるいは作品のさしえなどから模写して掲げたが、その出典は省略した。

2 文様・紋所・構造等、語釈のみではその意を尽くしがたいものについて、それを図示した。

主要出典一覧

本辞典で用例としてとりあげた文献のうち主なものについて、本辞典で示すジャンルと書名とを五十音順に掲げる。ジャンルを付けた作品は、そのジャンルのもとこれに括して示す。

ジャンルや書名を略称で示した場合は、正称などを＝であげ、二内に、著者編者名・成立年、また必要に応じて、通称や別称、資料の性格などを記す。

著者編者が複数のときは一～二名をあげ、不明・不確実のものは省略する。

成立年は西暦年で示すが、およそのことしかわからないものは世紀・時代、作者の没年などを記す。また、序・跋・刊行年、初演の年などをあげる場合もある。

嵯峨紗（行誉・一四四六・辞書）
赤染衛門集（赤染衛門・一一世紀中・私家集）
朝倉孝景条々（朝倉孝（敏）景・一五世紀後・武家家訓）
あさちが露（一三世紀後・物語）
東遊（一〇世紀前・歌舞）
吾妻鏡（鎌倉幕府官撰・一四世紀前頃編（記事は一一八〇～一二六六）・編年体公的記録）
吾妻問答（飯尾宗祇・一五世紀後・連歌論）
天草版金句集（一五九三刊・イエズス会刊）
天草本伊曽保（一五九三刊・イエズス会刊）
天草本平家（ハビアン編・一五九二刊・イエズス会刊）
天草本平家・伊曽保言葉の和げ（一五九三・両書の難語解）
海人刈藻物語（一三世紀後）
海人藻芥（惠命院宣守・一五世紀前、有職故実）
有明の別（一二世紀後・物語）
十六夜日記（阿仏尼・一三世紀後・紀行）
石山寺本金剛般若経集験記平安初期点（八五〇頃・訓点資料）
石山本願寺日記（宇野主水日記、顕如上人文案、私心記、証如上人日記、証如上人書札案を含む・一六世紀中～後）
医心方天養二年点（一一四五・訓点資料）
和泉式部集（和泉式部・一一世紀中・私家集）
和泉式部日記（和泉式部・一一世紀前）
伊勢＝伊勢物語（一〇世紀前・歌物語）
伊勢集（伊勢・他撰）・一一世紀後・私家集）
伊勢大輔集（伊勢大輔・一一世紀中・私家集）
伊勢大輔集（伊勢大輔・一一世紀中・私家集）
一言芳談（一二九七～一三五〇・法語）
一枚起請文（法然・一二一二）
今鏡（藤原為経か・一一七〇・歴史物語）
今川大双紙（今川了俊か・一五世紀前・武家故実）
今川仮名目録（今川氏親、義元・一六世紀中・武家家法）
色葉字類抄（橘忠兼・治承年間（一一七七～八一）・辞書）
浮＝浮世草子
沖津白浪（都の錦・一七〇二刊）・傾城色三味線（江島其磧・一七〇一刊）
元禄大平記（都の錦・一七〇二刊・別称、諸芸大平記）
好色一代男（井原西鶴・一六八二刊）・好色一代女（井原西鶴・一六八六刊）・好色訓蒙図彙（無色軒三白居士・一六八六刊）・好色五人女（井原西鶴・一六八六刊）・好色盛衰記（井原西鶴・一六八八刊）・好色万金丹（夜食時分・一六九四刊）・御前義経記（西沢一風・一七〇〇刊）・西鶴置土産（井原西鶴・一六九三刊）・西鶴織留（井原西鶴・一六九四刊）・諸道聴耳世間猿（土田秋成・一七六六刊）
新色五巻書（西沢一風・一六九八刊）・世間子息気質（江島其磧・一七一五刊）・世間娘容気（江島其磧・一七一六刊）・世間胸算用（井原西鶴・一六九二刊）・当世乙女鑑（錦文流・一七〇五序）・男色大鑑（井原西鶴・一六八七刊）
日本永代蔵（井原西鶴・一六八八刊）・日本新永代蔵（北条団水・一七一三刊）・武家義理物語（井原西鶴・一六八八刊）・武道伝来記（井原西鶴・一六八七刊）・本朝桜陰比事（井原西鶴・一六八九刊）・本朝二十不孝（井原西鶴・一六八六刊）・万の文反古（井原西鶴・一六九四刊）
右京大夫集＝建礼門院右京大夫集（建礼門院右京大夫・一三世紀前・私家集）
宇治拾遺＝宇治拾遺物語（一三世紀前・説話集）
打聞集（一二世紀前・説話集）
宇津保＝宇津保物語（一〇世紀後）
馬内侍集（馬内侍・一〇世紀後・私家集）
上井覚兼日記（上井覚兼・一五七四～八六）
運歩色葉＝運歩色葉集（一五四八・辞書）
栄花＝栄花物語（一一世紀中～後・別称、「世継物語」・歴史物語）
永久百首（源顕仲、藤原仲実、源俊頼ら・一一一六・別称「永郎百首」・「堀河院後度百首」）
易林本節用集（一五九七刊・辞書）
延喜式（藤原時平、藤原忠平ら編・九二七・法典、祝詞は、九条家本、出雲板等の訓により「延喜式」祝詞」と示す）
宴曲
撰要目録（明空・一三〇一）
宴曲集（明空撰・一三〇一）
塩山仮名法語（抜隊得勝・一四世紀後・別称「抜隊仮名法語」）
園太暦（洞院公賢・一三二一～六〇・日記）
おあむ物語（山田去暦女談・一七世紀中・軍記）
往生大要抄（法然・一三世紀前・仏教書）
往生要集（源信・一〇世紀後・仏教書）
大鏡（一二世紀前・歴史物語）
大上臈御名之事（一六世紀初・女房故実）
落穂＝落穂物語（一〇世紀後）
御触書天保集成（江戸幕府評定所官撰・一七八八～一八三七）
御湯殿上日記（一四七七～一六八七・女官らの日記）
女意宝記（狸田寸木子（苗村文伯）・一六九二刊・女房作法）
仮＝仮名草子
伊曽保物語（一五九六～一六二四刊）・犬枕（藁宗巴・一六〇六頃刊）・浮世物語（浅井了意・一六六五～六六刊）
満雪物語（一六三二刊）・恨の介（一六〇九頃）・伽婢子（浅井了意・一六六六刊）・可笑記（如儡子・一六三六）
昨日は今日の物語（一六二四頃）・恠草（井上小左衛門・一六四七刊）・水鳥記（茨木春朔・一六六二刊）・竹斎（富山道治・一六三五頃・別称、竹斎物語）・東海道名所記（浅井了意・一六五九～四〇刊）・尤双紙（斎藤徳元・一六三二刊）・元の木阿弥（一六八〇刊）
海道記（一三世紀前・紀行）
懐風藻（七五一・序・漢詩集）
河海抄（四辻善成・一四世紀中・「源氏物語」の注釈書）
下学集（東麓破衲・一四四四・辞書）
花鳥（世阿弥元清・一四二四・能楽書）
歌経標式（藤原浜成・七七二・歌学書）
神楽歌（九世紀後）
蜻蛉＝蜻蛉日記（藤原道綱母・一〇世紀中）
兼盛集（平兼盛・一〇世紀後・私家集）
歌舞妓年代記（立川（談洲楼）焉馬著、松高書春亭画・一八一一～一五）
歌舞伊脚記（金春禅竹・一四五六・能楽書）
賀茂女集（賀茂保憲女・一一世紀前・私家集）
歌語
開口集（一五一八序）・淋歌座之慰（一六七六）・山家鳥虫歌（天中原長常南山編・一七七二刊）・新編歌祭文集（元禄～享保頃）・松の葉（秀松軒・一七〇三刊）・隆達節小歌集成（隆達・文禄～慶長頃）
唐物語（藤原成範か・一三世紀中・中国説話の和訳）
閑居友（慈円または慶政撰か・一三世紀前・説話集）
菅家文章（菅原道真・一〇世紀前・漢詩文集）
漢書楊雄伝天暦二年点（藤原良佐加点・九四八・訓点資料）
看聞御記（伏見宮貞成親王・一四一六～四八・日記）
輪林清麗集（景徐周麟・一六世紀前・漢詩文集）
伎＝歌舞伎
青砥稿花紅彩画（河竹黙阿弥・一八六二初演・通称「白浪五人男」）・伊賀越乗掛合羽（奈河亀輔・一七七六初演）・幼稚子敵討（並木正三・一七五三初演）・お染久松色読販（鶴屋南北・一八二五初演）・盟三五大切（鶴屋南北・一八二五初演）・韓人漢文手管始（並木五瓶・一七八九初演・通称「唐人殺し」）・勧善懲悪覗機関（河竹黙阿弥・一八六二初演・通称「村井長庵」）・天衣紛上野初花（河竹黙阿弥・一八八一初演・通称「河内山」）・傾城壬生大念仏（近松門左衛門・一七〇二初演）・小袖曽我劇色縫（河竹黙阿弥・一八五九初演・通称「十六夜清心」）・御摂勧進帳（桜田治助・一七七三初演）・桜姫東文章（鶴屋南北・一八三一初演）・参会名護屋（中村明石清三郎、市川団十郎・一六九七初演）・三人吉三廓初買（河竹黙阿弥・一八六〇初演）・四天王楓江戸錦（鶴屋南北・一八一四初演）・鳥辺山心中（河竹黙阿弥・一八五六初演・通称「文弥殺し」）・梅雨小袖昔八丈（河竹黙阿弥・一八七三初演・通称「髪結新三」）・東海道四谷怪談（鶴屋南北・一八二五初演）・処女歌浮名横櫛（河竹黙阿弥・一八六四初演・通称「切られお富」）・蹴鞠聚曽我（鶴屋南北・一八二五初演）・名歌徳三舞千垣（桜田治助・一八〇一初演）・与話情浮名横櫛（瀬川如皐・一八五〇初演・通称「切られ与三」）
黄＝黄表紙
啞多雌取帳（志水燕十・一七八三刊）・江戸生艶気樺焼（山東京伝・一七八五刊）・敵討義女英（南杣笑楚満人・一七九五刊）・莫切自根金生木（唐来参和・一七八五刊）・金々先生栄花夢（恋川春町・一七七五刊）・孔子縞于時藍染（山東京伝・一七八九刊）・高漫斉行脚日記（恋川春町・一七七六刊）・御存商売物（山東京伝・一七八二刊）・心学早染草（山東京伝・一七九〇刊）・即席耳学問（市場通笑・一七九〇刊）・文武二道万石通（朋誠堂喜三二・一七八八刊）・見徳一炊夢（朋誠堂喜三二・一七八一刊）・無益委記（恋川春町・一七七九刊）・世上洒落見絵図（山東京伝・一七九一刊）
義経記（室町時代・軍記）
儀式＝貞観儀式（八七二頃・儀式書）
きやどへかどる（ルイス＝デ＝グラナダ著・一五九九・キリシタン文学）
久安百首（崇徳天皇、藤原公能ら・一一五三・別称「久安六年御百首」・「崇徳院御百首」）
鳩翁道話（柴田章（鳩翁）述・一八三四刊・心学書）
九州問答（二条良基・一三七六・連歌論）
九暦（藤原師輔・九三〇～六〇・別称「九記」・「九条記」・日記）
狂歌
吾吟我集（石田未得・一六四九）・後撰夷曲集（生白堂行風・一六六六刊）・万載狂歌集（大田南畝、朱楽菅江編・一七八三刊）
教行信証（親鸞・一二二四・別称「顕浄土真実教行証文類」）・仏教書
教訓抄（狛近真・一二三三・雅楽）
狂言
朝比奈、石神、右流左止、右近左近、鱸の音、鎌腹、禁野、子盗人、察化、宗論、末広がり、鱸庖丁、茶壺、泣尼、縄綯、比丘貞、二人袴、鰻頭、連歌十徳、連歌盗人など、（虎明本・寛永一九年写、虎清本・正保三年写、虎寛本・寛政四年写、天理本・寛永頃写、波形本・天明頃写、寳形本・文政末期写、天正本・天正六年写、集成本・狂言集成などの諸本を区別して示した）
狂言記　曲名は省略する。

絵入狂言記（元禄一二年刊）、絵入続狂言記（元禄一三年刊）、絵入狂言記拾遺（享保一五年刊）を、一括して狂言記とした。
玉葉＝玉葉和歌集（藤原為兼撰・一三一二・勅撰集）
玉葉（九条兼実・一一六四～一二〇〇・別称「玉海」・日記）
清輔集（藤原清輔・一二世紀後・私家集）
挙白集（木下長嘯子詠・公軌、山本春正編・一六四九・歌文集）
貴理部端往来（一六世紀後）
貴嶺問答（中山忠親・一二世紀後・往来物）
金槐集（源実朝・一二一三・私家集）
琴歌譜（九八一・歌謡）
公任集（藤原公任・一一世紀中・私家集）
禁秘抄（順徳天皇・一二一三・有職故実）
金葉＝金葉和歌集（源俊頼撰・一一二四～二七・勅撰集）
禁令考＝徳川禁令考（司法省編・一八九五編・法令集）
愚管抄（慈円・一二一〇・通史）
口伝鈔（覚如・一三三一・仏教書）
国基集（津守国基・一二世紀前・私家集）
愚迷発心集（貞慶・一三世紀前・仏教書）
経国集（良岑安世、滋野貞主ら編・八二五序・漢詩文集）
月清集＝秋篠月清集（藤原良経・一三世紀前・私家集）
源氏＝源氏物語（紫式部・一一世紀前）
現存六帖＝現存和歌六帖（藤原光俊撰・一二四九・私撰集）
源平盛衰記（一四世紀前・軍記）
広益国産考（大蔵永常・一八五九刊）
合巻
　修紫田舎源氏（柳亭種彦・一八二九～四二刊）
江家次第（大江匡房・一二世紀前・有職故実）
江談抄（大江匡房談、藤原実兼記・一二世紀前）
鉱木日録（玉虫茂誰撰・一八六〇・洋行日記）
甲陽軍鑑（高坂昌信、春日惣次郎書蔵、小幡景憲補・一七世紀前・別称「武田全書」・軍学書）
参若
　いぶき・いるか・烏帽子折・景清・しつか・信太・大臣・高たち・堀川・満仲・文覚・屋嶋軍など、（室町時代末成立）
五音（世阿弥元清・一五世紀中・能楽書）
古今＝古今和歌集（紀貫之、紀友則ら撰・九〇五（九〇八～〇九、九一三～一四の説もあり）・勅撰集）
古今注＝古今和歌六帖（一〇世紀後・私撰集）
極楽寺殿御消息（北条重時・一二五六～六一・武家家訓）
菩の衣（一三世紀後・物語）
古今著聞集（橘成季・一二五四跋・説話集）
古今連談集（高山宗砌・一五世紀中・連歌論）
古事記（太安万侶編・七一二・歴史書）
古事談（源顕兼・一三世紀前・説話集）
後拾遺＝後拾遺和歌集（藤原通俊撰・一〇八六・勅撰集）
後撰＝後撰和歌集（大中臣能宣、清原元輔、源順ら撰・一〇世紀中・勅撰集）
小大君集（小大君・一一世紀前・私家集）
滑＝滑稽本
　浮世床（〈初・二編〉式亭三馬、〈三編〉滝亭鯉丈・一八一三～二三）　浮世風呂（式亭三馬・一八〇九～一三刊）
七偏人（梅亭金鶴、六編上）溪斎英泉、〈五編中・下〉与風亭枝成・一八二〇～四九刊）　膝栗毛＝東海道中膝栗毛（十返舎一九・一八〇二～〇九刊）　風来六部集（平賀源内・一七八〇序）
国歌八論（荷田在満（本居宣長評）・一七四二・歌学書）
御当家令条（藤原親長編・一七一一か（記事は一五九七～一六九六）・江戸幕府の法令書）
古道大意（平田篤胤・一八二四刊・神道書）
後鳥羽院御口伝（後鳥羽院・一三世紀前・歌学書）
後二条師通記（藤原師通・一〇八三～九九・日記）
古本説話集（一二世紀前・説話集）
小町集（小野小町（他撰）・私家集）
古来風体抄（藤原俊成・一一九七・歌学書）
是貞親王歌合（是貞親王主催・八九三以前）
是則集（坂上是則・一〇世紀前・私家集）
権記（藤原行成・九九一～一〇一一・日記）
今昔＝今昔物語集（一二世紀前・説話集）
こんてむつすむん地（一六一〇刊・キリシタン文学）
斎宮女御集（徽子内親王・一〇世紀後・私家集）
財政経済史料＝日本財政経済史料（大蔵省編・一九二二～二三刊・江戸幕府の財政経済制度調査のため、旧記、古文書類を、事項別に編集）
西大寺本金光明最勝王経平安初期点（八三〇頃・訓点資料）
催馬楽（七世紀後～八世紀前・歌謡）
細流抄（三条西公条・〈一次本〉一五二八、〈二次本〉一五三四・源氏物語」の注釈書）
相模集（相模・一一世紀中・私家集）
左経記（源経頼・一〇一六～三六・日記）
狭衣＝狭衣物語（六条斎院禖子内親王宣旨か・一一世紀後）
ささめごと（心敬・一四六三・連歌論）
雑俳
　青木賊（園田荻風編・一七八四刊）　歌謡衣（丹頂斎一声編・一八三四～四四刊）　川傍柳（牛込御納戸町蓬莱遊・一七八〇～八三刊）　未摘花（似実軒編・一七七六～一八〇一刊）　武玉川（〈初～一五編〉慶紀逸、〈一六～一八編〉二世紀逸・一七五〇～七三刊）　柳筥（麻布柳水連・一七八三～八六刊）　柳鶴翼（麹町高砂連・〈初篇・二篇〉未発見、〈三篇〉一七八六刊）　柳多留（柄井川柳等編・一七六五～一八三八刊）　柳多留拾遺（一八〇一序）
鹿岐典侍＝鹿岐典侍日記（藤原長子・一二世紀前）
実隆公記（三条西実隆・一四七四～一五三五・日記）
更級＝更級日記（菅原孝標女・一一世紀中）
申楽談儀（世阿弥元清・一四三〇・能楽書）
山槐記（中山忠親・一一五一～九四・日記）
山家集（西行・一二世紀後・私家集）
三教指帰（空海・八世紀後・仏教書）
三国伝記（玄棟・一五世紀前・説話集）
三帖和讃（親鸞・一三世紀中・正像末、浄土、高僧の三部から成る）
三代格＝類聚三代格（一一世紀・「弘仁格」「貞観格」「延喜格」の類纂）
三代実録＝日本三代実録（源能有、藤原時平ら・九〇一編・勅撰の日本史書、六国史の一）
三道（世阿弥元清・一四二三・能楽書）
サントスの御作業（長崎版、ビセンテ訳・一五九一刊・キリシタン文学）
三宝絵詞（源為憲・九八四・説話集、「観智院本三宝絵」と示す）
散木奇歌集（源俊頼・一二世紀前・私家集）
詞花＝詞花和歌集（藤原顕輔撰・一二世紀中・勅撰集）
四河入海（笑雲清三編・一五三四・抄物）
地方落穂集（東武隠士寒略・一七六三・農政書）
地方凡例録（大石久敬・一七九四跋・農政書）
至花道（世阿弥元清・一四二〇・能楽書）
史記抄（桃源瑞仙・一四七七・抄物）
重之集（源重之・一一世紀前・私家集）
私聚百因縁集（住信・一二五七・説話集）
志都の岩屋講本（平田篤胤・一八一一刊・別称「医道大意」）
地蔵十輪経元慶七年点（八八三・訓点資料）
地蔵菩薩霊験記（実睿、良観・一六世紀後）
順集（源順・一〇世紀後・私家集）
順集（源順・一〇世紀後・私家集）
十一番歌合＝七十一番職人歌合（室町時代末）
侍中群要（橘広相・九世紀後・有職、制度）
十訓抄（一二五二序・説話集）
酒＝酒落本
　異素六帖（沢田東江・一七五七刊）　色深淵睡夢（雲鶴屋高銀、〈下〉柳国猫春・一八二六刊）　卯地臭意（雷木尾主人・一七八三刊）　岐蘇呼子鳥（田螺金魚・一七七七刊）　傾城買四十八手（山東京伝・一七九〇刊）　契情買虎之巻（田螺金魚・一七七八刊）　傾城買二筋道（梅暮里谷峨・一七九八刊）　月花余情（獣笑閣主人・一七五六刊）　甲駅新話（大田南畝・一七七五刊）　古契三蝶（山東京伝・一七八七刊）　青楼昼之世界錦之裏（山東京伝・一七九一刊）　陀羅人伝（山岡浚明・泥郎子）・一七四九序、一七五三刊）　世説新語茶（大田南畝・一七七二～八一刊）　辰巳之園（夢中山人寝言先生・一七七〇刊）　辰巳婦言（式亭三馬・一七九八刊）　通言総籬（山東京伝・一七八七刊）　箱まくら（西村定雅（大槻堂有長）・一八二二刊）　百花繚林（探花亭主人・一七四七刊）　遊子方言（丹波屋利兵衛（田舎老人多田爺）・一七七〇刊）　両巴扈言（撃鉦先生・一七七二刊）
釈日本紀（卜部懐賢編・鎌倉時代末・「日本書紀」の注釈書）
沙石集（無住一円・一二世紀後・説話集、「米沢本沙石集」「梵舜本沙石集」「貞享版沙石集」などと示す）
拾遺＝拾遺和歌集（花山天皇撰か・寛弘（一〇〇四～一二）頃・勅撰集）
拾遺愚草（藤原定家・一三世紀中・私家集）
拾玉集（慈円詠、尊円親王撰・一三四六・私家集、「広本拾玉集」と示す）
拾玉得花（世阿弥元清・一四二八・能楽書）
十善法語（慈鳳・一八世紀後）
袖中抄（顕昭・一一八五～八七・歌学書）
習道書（世阿弥元清・一四三〇・能楽書）
授業編（江村北海・一七八三・漢学書）
俊成卿女集（藤原俊成女・一三世紀中・私家集）
浄＝浄瑠璃
　伊賀越道中双六（近松半二ら・一七八三初演）　一谷嫩軍記（並木宗輔ら・一七五一初演）　妹背山婦女庭訓（近松半二ら・一七七一初演）　絵本太功記（近松柳ら・一七七九初演）　近江源氏先陣館（近松半二ら・一七六九初演）　女殺油地獄（近松門左衛門・一七二一初演）　重井筒（近松門左衛門・一七四〇頃初演）　仮名手本忠臣蔵（竹田出雲ら・一七四八初演）　刈萱桑門筑紫轟（並木宗輔ら・一七三五初演）　傾城反魂香（近松門左衛門・一七〇八初演）　源平布引滝（並木宗輔ら・一七四九初演）　国性爺合戦（近松門左衛門・一七一五初演）　五十年忌歌念仏（近松門左衛門・一七一二初演）　出世景清（近松門左衛門・一六八六初演）　心中天の網島（近松門左衛門・一七一〇初演）　心中宵庚申（近松門左衛門・一七二一初演）　新版歌祭文（近松半二・一七八〇初演）　通称「お染久松」　神霊矢口渡（平賀源内・一七七〇初演）　摂州合邦辻（菅専助ら・一七七二初演）　菅原伝授手習鑑（竹田出雲ら・一七四六初演）　大経師昔暦（近松門左衛門・一七一五初演）　丹波与作待夜の小室節（近松門左衛門・一七〇八初演）　夏祭浪花鑑（並木宗輔ら・一七四五初演）　寿の門松（近松門左衛門・一七一八初演）　博多小女郎波枕（近松門左衛門・一七一八初演）　平家女護島（近松門左衛門・一七一九初演）　堀川波鼓（近松門左衛門・一七〇七初演）　本朝二十四孝（近松半二ら・一七六六初演）　源頼家源実朝鎌倉三代記（近松半二ら・一七七〇初演）　外題「太平頭鎧飾」・一七八一再演、外題「鎌倉三代記」）　真迹の飛脚（近松門左衛門・一七一一初演）　伽羅先代萩（近松貫四ら・一七八五初演）　八百屋お七（紀海音・一七一四～一七一以前初演）　夕霧阿波鳴渡（近松門左衛門・一七一七初演）　雅の権三重帷子（近松門左衛門・一七一二初演）　用明天皇職人鑑（近松門左衛門・一七〇五初

演）義経千本桜（竹田出雲ら・一七四七初演）顕光跡目論（一六六一～七三頃上演）碗久末松山（紀海音・一七〇八初演）

松納遺話（布施松納著、八宮斎編・一八一四～六六刊・心学書）

捷解新語（康熙聖・一六七六刊・朝鮮でつくられた日本語学習書）

私用抄（心敬・一四七一・連歌論）

詞葉新雅（富士谷御杖・一七九二刊・辞書）

成尋母集（成尋阿闍梨母・一一世紀後・私家集）

正徹物語（正徹・一五世紀中・上巻「徹書記物語」、下巻「清輝茶話」とも、歌学書）

正法眼蔵（道元・一二三一～五三・仏教書）

正法眼蔵随聞記（道元述、孤雲懐奘編・一三世紀中）

正宝事録（江戸の町名主某の編纂・一六四七～一七五五か・町触を編年体に蒐録）

勝鬘経義疏（伝聖徳太子・六一一）

将門記（一〇世紀中・軍記、承徳三年点で採用した場合には「将門」記承徳三年点」と示す）

小右記（藤原実資・九八二～一〇三二・日記）

性霊集（空海著、真済編（巻一～七）、済暹補（巻八～一〇）・〈巻一～七〉八三四頃、〈巻八～一〇〉一〇七九・別称「遍照発揮性霊集」巻一～七）、「続遍照発揮性霊集」補闕抄（巻八～一〇）・漢詩文集）

書紀＝日本書紀（舎人親王ら・七二〇・勅撰の史書、六国史の一、岩崎本、前田本、書陵部本、北野本、水戸本などの訓により読み下す）

続古今＝続古今和歌集（藤原為家、藤原基家、藤原家良、藤原行家、藤原光俊ら撰・一二六五・勅撰集）

続後拾遺＝続後拾遺和歌集（藤原為藤、藤原為定撰・一四世紀前・勅撰集）

続後撰＝続後撰和歌集（藤原為家撰・一二五一・勅撰集）

続詞花＝続詞花和歌集（藤原清輔撰・一一六五～七七・私撰集）

式子内親王集（式子内親王・一二世紀後・私家集）

続拾遺＝続拾遺和歌集（藤原為氏撰・一二七八・勅撰集）

続千載＝続千載和歌集（藤原為世撰・一三一九（一二〇）・勅撰集）

続日本紀（藤原継縄ら撰・七九七編（六九七～七九一の記事を記載）・勅撰の史書、六国史の一、宣命は「続日本紀宣命」とする）

続日本後紀（藤原良房ら撰・八六九・勅撰の史書、六国史の一）

書言字考節用集（槇島昭武・一六九八刊・辞書）

女中詞（伊藤幸元、伊藤幸元・一六九二・語彙）

新古今＝新古今和歌集（藤原定家ら撰・一二〇五・勅撰集）

新後拾遺＝新後拾遺和歌集（藤原為遠ら撰・一三八三成、一三八四補訂・勅撰集）

新後撰＝新後撰和歌集（藤原為世撰・一三〇三・勅撰集）

新札往来（眼阿・一三六七）

新拾遺＝新拾遺和歌集（藤原為明、頓阿撰・一三八四（序は一三八二）・勅撰集）

新続古今＝新続古今和歌集（飛鳥井雅世撰・一四三九・勅撰集）

新千載＝新千載和歌集（藤原為定撰・一三五九・勅撰集）

新撰字鏡（昌住・昌泰年間（八九八～九〇一）・天治本、享和本などを用いる。辞書）

新撰髄脳（藤原公任・一一世紀中・歌学書）

新撰万葉＝新撰万葉集（一〇世紀前・別称「菅家万葉集」・漢詩、和歌の私撰集）

新撰朗詠＝新撰朗詠集（藤原基俊編・一二世紀中・歌謡集）

新撰六帖＝新撰六帖題和歌（藤原家良ら・一三世紀中・別称「新撰和歌六帖」・私撰集）

信長公記（太田牛一・一七世紀前・伝記）

新勅撰＝新勅撰和歌集（藤原定家撰・一二三四・勅撰集）

塵添壒嚢抄（一五三二・塵袋と壒嚢抄とを合わせたもの・辞書）

神道集（安居院編・中世中期・説話集）

真如観（源信・一一世紀前・仏教書）

神皇正統記（北畠親房・一三三九（一三四三修訂）・史論）

新訳華厳経音義私記（七九四・訓点資料）

新業＝新業和歌集（宗良親王編・一三八一・準勅撰集）

親鸞聖人消息（親鸞・一三世紀中）

随＝随筆

一話一言（大田南畝・一七七九～一八一五）霊異雑志

（柳沢淇園か・一八四三刊）折たく柴の記（新井白石・一七一二頃）槐記（近衛家熙述、山科道安記・一七二四～三五・別称「霊上茶話」）花月草紙（松平定信・一九世紀初）甲子夜話（松浦静山・一八二一～五七）嬉遊笑覧（喜多村信節・一八三〇序）孔雀楼筆記（清田儋叟・一七六八）觀蹠談（上田秋成・一八二二刊）山中ノ說舌（田能村竹田・一八一三）鷄恩記（松永貞徳・六四四頃）玉勝間（本居宣長・一七九四～一八一二）胆大小心録（上田秋成・一八〇八）貞丈雑記（伊勢貞丈・一七八四頃）独寝（柳沢淇園・一七二四）松屋筆記（小山田与清・一九世紀中）耳袋（根岸守信・一七三六～一八〇四）守貞漫稿（喜田川守貞・一八三八～五四）用捨箱（柳亭種彦・一八四一刊）

住吉＝住吉物語（鎌倉時代）

駿台雑話（室鳩巣・一七三二序・随筆体教訓書）

政事要略（惟宗允亮・一一世紀前・法制書）

制度通（伊藤東涯・一七二四序・法制論）

尺素往来（伝一条兼良撰・一五世紀中～後）

世俗諺文献倉期点（一二五〇頃・訓点資料）

説経＝説経節

をくりの判官・伝太力善薩・さんせう太夫など、（室町時代末～江戸時代）

千五百番歌合（藤原定家ら・一三世紀前）

千載＝千載和歌集（藤原俊成撰・一一八七・勅撰集）

撰集抄（鎌倉時代・説話集）

塵注和名抄＝塵注和名類聚抄（狩谷棭斎・一八二七・辞書）

禅鳳雑談（金春禅鳳・一五五三・能楽書）

宗五大草紙（伊勢貞頼・一五二八・武家故実）

草根集（正徹編・一五世紀後・私家集）

雑談集（無住・一三〇五・説話集）

雑兵物語（松平信興か・一六八三・兵法書）

曽我物語（南北朝頃・軍記）

曽丹集（曽禰好忠・一〇世紀後・私家集）

台記（藤原頼長・一一三六～五五・別称「字槐記」・字治左府記）

太閤記（小瀬甫庵・一六二五序・伝記）

大慈恩寺三蔵法師伝（〈院政期点〉一〇八〇～一一一〇頃、〈承徳三年点〉一〇九九、〈永久四年点〉一一一六、〈寿応二年点〉一一七〇などの諸点で示す、訓点資料）

大乗院寺社雑事記（尋尊・政覚・経尋・一四五〇～一五二七・日記）

大唐西域記長寛元年点（一一六三・訓点資料）

大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点（八五〇頃・訓点資料）

太平記（一四世紀後・軍記）

竹取物語（一一世紀後）

竹取＝竹取物語（一〇世紀中）

曽喩尽（松葉軒東井編・一七八六序・膝栗毛）

たまきはる（建春門院中納言（藤原俊成女）・一三世紀前・別称「建寿御前日記」・日記）

為兼和歌抄（藤原為兼・一三世紀後・歌学書）

談＝談義本

当世下手談義（静観房好阿・一七五二刊）艶道通鑑（増穂残口・一七一五刊）根無草（平賀源内・〈前〉一七六三刊、〈後〉一七六九刊）風流志道軒伝（平賀源内・一七六三刊）古朽木（朋誠堂喜三二・一七八〇刊）

丹後守為忠百首（藤原為忠ら・一二世紀前）

歎異抄（親鸞述、唯円筆・一三世紀後・法語）

親元日記（蜷川親元・一四六一～八五・日記）

千里集（大江千里・九八四・別称「句題和歌」・私家集）

茶屋諸分調方記（一六九三刊）

中外抄（藤原忠実述、中原師元記・一二世紀中・故実、説話）

中華若木詩抄（如月寿印注・一六三三刊・抄物）

中右記（藤原宗忠・一〇八七～一一三八・日記）

長秋詠藻（藤原俊成・一一七八・私家集）

鹿袋（一三世紀後・辞書）

椎葉記（伏見宮貞成親王・一四三三・家伝）

蒐玖波集（一条良基編・一三五六・連歌集）

筑波問答（一条良基・一四世紀後・連歌論）

堤中納言＝堤中納言物語（一一世紀後～一二世紀後）

経信卿・一一世紀後・私家集）

貫之集（紀貫之の他撰・一〇世紀中・私家集）

徒然草（卜部兼好・一四世紀前・随筆）

庭訓往来（玄恵か・南北朝後期～室町前期撰）

鉄眼禅師仮名法語（鉄眼道光・一六九一刊）

伝光録（瑩山紹瑾・一四世紀前・仏教書）

天正本節用集（一五九〇刊・辞書）

天慶四年内裏歌合（村上天皇主催・九六〇）

天理本金剛般若経集験記平安初期点（八五〇頃・訓点資料）

藤原忠実・一〇九八～一一一八・日記）

東関紀行（一三世紀中）

東大寺諷誦文平安初期点（八三〇頃・訓点資料）

多武峰少将＝多武峰少将物語（藤原高光・一〇世紀中頃・別称「高光日記」）

東野州聞書（宗常縁・一五世紀中・歌学書）

栂尾明恵上人伝記（喜海・一二三二～五〇）

伽＝御伽草子

秋夜長物語（南北朝時代）御曹子島渡・唐糸草子・唐崎物語・熊野の本地・木幡狐・袈裟氏草紙・三人法師・二十四孝・猿の草紙・鉢かづき・蛤の草紙・福富草紙・文正草子・梵天国・みしま・物くさ太郎など、（室町時代・末成立）

言継卿記（山科言継・一五二七～七六・日記）

土左＝土左日記（紀貫之・九三五～九四五・紀行）

どちりなきりしたん（一六〇〇年版・キリシタン文学）

友則集（紀友則・平安中期・私家集）

とりかへばや＝とりかへばや物語（一二世紀後・別称「今とはずがたり」（後深草院二条・一四世紀前・日記）

とりかへばや（中務・一〇世紀後・私家集）

中務集（中務・一〇世紀後・私家集）

難波土産（穂積以貫著、木下蘭皐編・一七三八刊・浄瑠璃注家）

南海寄帰内法伝平安後期点（一〇五〇頃・訓点資料）

南水漫遊拾遺（浜松歌国（鳳々亭南水）・一九世紀前・演劇書）

日蓮遺文

開目抄（一二七二）・諫暁八幡抄（一二八〇）・佐渡御書（一二七二）・守護国家論（一二五九）・撰時抄（一二七五）・加説修行鈔（一二七三）・報恩抄（一二七六）・本尊問答抄（一二七八）・立正安国論（一二六〇）・立正観鈔（一二七四）（以上は日蓮）

日葡辞書（イエズス会宣教師編・〈本編〉一六〇三、〈補遺〉一六〇四・日本語をポルトガル語で説明した辞書）

日本紀竟宴和歌（藤原国経ら・八八二～九四三）

日本紀私記（院政期頃成立・御巫本、水戸本による）

日本後紀（藤原冬嗣、藤原良房ら撰・八四〇序・勅撰の史書、六国史の一）

人情＝人情本

明烏後正夢（為永春水、滝亭鯉丈・一八二一～二四刊）

仮名文章娘節用（曲山人・一八三一～三四刊）閑情末摘花（松亭金水・一八三九～四一）春色梅児誉美（為永春水・一八三二～三三刊）春色辰巳園（為永春水・一八三

三／三五刊）

俳＝俳諧

晴野（山本荷兮編・一六八九序）　犬筑波集（山崎宗鑑編・一六世紀中）　鵠衣（横井也有・七八五跋（前編）一七八七刊）　後編（一七八八刊）　（続編拾遺）一八一三刊）　犬子集（松江重頼編・一六三三刊）　笈日記（各務支考撰・一六九五刊）　笈の小文（松尾芭蕉・一七世紀後）　奥の細道（松尾芭蕉・一六九五頃）　おらが春（小林一茶・一八一九）　鹿島紀行（松尾芭蕉・一六八七）　玉海集（安原貞室・一六五六刊）　田臥集（編・一八〇九跋）　去来抄（向井去来・一七〇四頃）　毛吹草（松江重頼編・一六三八序）　幻住庵記（松尾芭蕉・一六九〇頃）　五元集（榎本其角著、百万坊旨原編・一七四七刊）　古今俳諧明題集（吸露庵原岱・一七六三）　小町踊（野々口立圃編・一六六五刊）　嵐山集（鶏冠井令徳編・一六五一刊）　西鶴大矢数（井原西鶴・一六八一刊）　更科紀行（松尾芭蕉・一六八八）　猿蓑（向井去来、野沢凡兆編・一六九一刊）　三冊子（服部土芳・一七〇四）　七番日記（小林一茶・一八一〇／一八）　新増犬筑波集（松永貞徳・一六四三・上「油糟」、下「淀川」）　新花摘（与謝蕪村・一七七七頃）　炭俵（志田野坡、小泉孤屋、池田利牛共編・一六九四）　井華集（高井几董・一七八九刊）　世説（高桑閑更・一七八五刊）　続猿蓑（服部沾圃ら編・一六九八刊）　太祇句選（三宅嘯山・与謝蕪村・雅因選、春錦編・一七七三刊）　鷹筑波（山本西武編・六三三八刊）　七柏集（大島蓼太編・一七八一刊）　野ざらし紀行（松尾芭蕉・一六八五／八六頃）　春の日（山本荷兮編・一六八六刊）　ひさご（浜田珍碩編・一六九〇刊）　蕪村句集（高井几董編・一七八四刊）　冬の日（山本荷兮編・一六八四刊）　文化句帖（小林一茶・一八〇四／一〇八）　本朝文選（森川許六編・一七〇五）　虚栗（榎本其角編・一六八三刊）　山の井（北村季吟・一六四六）

梅松論（細川一族か・一四世紀中・史論）

白氏文集天永四年点（藤原茂明加点・一一一三・訓点資料）

咄＝咄本

一休関東咄（一六七二刊）　鹿の子餅（木室卯雲・一七七二）　軽口露がはなし（露の五郎兵衛・一六九一刊）　聞上手（小松屋百亀・一七七三）　鹿の巻筆（鹿野武左衛門・一六八六刊）　醒睡笑（安楽庵策伝・一六二八刊）　鯛の味噌津（大田南畝・一七七九刊）

浜松中納言＝浜松中納言物語（伝菅原孝標女・一一世紀中）

遊子女王歌合（一九三以前・別称「寛平御時后宮歌合」）　檜垣嫗集（檜垣嫗・一〇世紀後・私家集）

秘蔵宝鑰（空海・九世紀前・仏教書）

人麿集（柿本人麿・八世紀後・私家集）

日次紀事（黒川道祐撰・一六八五序・年中行事）

百座法談＝法華百座法談聞書抄（一一一〇）

評判＝評判記

色道大鏡（畠山箕山・一六七八）　難波鑑（西水庵無底居士・一六八〇刊）　満散利久佐（畠山箕山・一六五六刊）

吉原すずめ（奥平市六・一六六七刊）

兵範記（平信範・一一三二／七一・日記）

風雅＝風雅和歌集（光厳院撰・一三四九頃・勅撰集）

風曲集（世阿弥元清・一五世紀前・能楽書）

風姿花伝（世阿弥元清・一五世紀前・能楽書）

袋草紙（藤原清輔・一一二世紀中・歌学書）

富家語（藤原忠実述、中原師元記・一一一五／六一・別称「富家語談」・故実や故事の談話）

曲付次第（世阿弥元清・一五世紀前・能楽書）

舞正語磨（秋扇翁・一六五八序・能楽書）

風俗歌（平安初期／平安中期）

仏足石歌（智努王か・八世紀中・金石文、和歌）

風土記（元明天皇の詔により諸国より集録・七一三（ただし、「出雲国風土記」は七三三）・地誌、「〇〇風土記」と国名を冠して示す）

夫木＝夫木和歌抄（藤原（藤原）長清撰・鎌倉後期・私撰集）

文華秀麗集（藤原冬嗣ら編・八一八・漢詩集）

文鏡秘府論保延四年点（一一三八・訓点資料）

文明本節用集（一五世紀後期・別称「雑字類書」・辞書）

平家＝平家物語（一三世紀前・軍記）

平治＝平治物語（一三世紀前・軍記）

平中＝平中物語（一〇世紀中・別称「平中日記」）

遍昭集（遍昭・一一世紀後（他撰か）・私家集）

弁内侍＝弁内侍日記（弁内侍・一三世紀中）

保元＝保元物語（一三世紀前・軍記）

方丈記（鴨長明・一二一二・随筆）

北条五代記（三浦茂信（浄心）・一六四一刊・雑史）

法然消息（法然・一二一二以前）

宝物集（平康頼・一二世紀後・説話集）

牧民金鑑（荻井顧道編・一八五三・法制書）

法華義疏（伝聖徳太子・七世紀前）

法華義疏長保四年点（一〇〇二・訓点資料）

発心集（鴨長明・一三世紀前・説話集）

堀河百首＝堀河院百首和歌（藤原公実、大江匡房ら・一二世紀前・別称「堀河院御時百首和歌」）

本草和名（深江（深根）輔仁著、多紀元簡校・一〇世紀前・本草書）

本朝無題詩（藤原忠通ら・一二世紀中・漢詩集）

本朝文粋（藤原明衡編・一一世紀中・漢詩文集）

本朝麗藻（高階積善編・一一世紀前・漢詩集）

毎月抄（藤原定家・一二一九・歌学書）

枕＝枕草子（清少納言・一〇世紀後・随筆）

満佐須計装束抄（源雅亮・一二世紀後・有職故実）

政基公旅引付（九条政基・一五〇一／〇四・日記）

増鏡（一四世紀中／後・歴史物語）

末灯鈔（親鸞・一三世紀後・仏教書）

饅頭屋本節用集（室町時代末・辞書）

万代＝万代和歌集（衣笠家良編か・一二四八・私撰集）

万葉＝万葉集（平安初期・歌集）

三河物語（大久保忠教・一六二二奥書・雑史）

水鏡（中山忠親か・一二世紀後・歴史物語）

躬恒集（凡河内躬恒・一〇世紀前・私家集）

御堂関白記（藤原道長・九九八／一〇二一・日記）

水無瀬三吟百韻（宗祇、肖柏、宗長・一四八八・連歌）

「長享二年正月二十二日水無瀬三吟百韻」と示す）

壬二集（藤原家隆・一三世紀前・私家集）

名義抄＝類聚名義抄（真言宗の僧か・一二世紀初・辞書。観智院本、書陵部本、高山寺本、蓮成院本、西本寺本などがある）

妙好人伝（仰誓、僧純・一八三〇／四三・伝記）

名語記（経尋・一二七五・辞書）

名目鈔（洞院実熙・一五世紀中・有職故実）

弥勒上生経賛平安初期点（八五〇頃・訓点資料）

無名抄（鴨長明・一三世紀前・歌学書）

無名草子（一二世紀後・物語評論）

紫式部集（紫式部・一一世紀前・私家集）

紫式部日記（紫式部・一一世紀前）

明月記（藤原定家・一一八〇／一二三五・日記）

明衡往来（藤原明衡・一一世紀中・別称「雲州往来」）

明徳記（一四世紀後・軍記）

首安状（鈴木正三・一六一九・法語）

業求抄（林宗二抄、清原宣賢撰・室町期・抄物）

毛詩抄（清原宣賢・一五三二／五五・抄物）

藻塩草（月村斎宗碩・一六世紀前・辞書）

元輔集（清原元輔・一〇世紀後・私家集）

基俊集（藤原基俊・一二世紀中・私家集）

文徳実録＝日本文徳天皇実録（藤原基経、菅原是善ら撰・八七九・勅撰の史書、六国史の一）

家持集（大伴家持・平安中期・私家集）

役者論語（八文字屋自笑編・一七七六刊・演劇論集）

八雲御抄（順徳天皇・一三世紀中・歌学書）

康富記（中原康富・一四〇一／五四・日記）

大和＝大和物語（一〇世紀中・歌物語）

結城氏新法度（結城政勝制定・一五五六・武家家法）

遊楽習道風見（世阿弥元清・一五世紀前・能楽書）

謡曲

安宅、敦盛、歌占、烏帽子折、景清、鉄馬天狗、自然居士、石橋、猩々、正尊、高砂、忠度、観世、鉢木、船弁慶、放下僧、松風、盛久、八島、輪蔵など（室町時代成立）

四座役者目録（観世元信・〈上〉一六四六、〈下〉一六五三）

吉野拾遺（一四世紀後・説話集）

輿地誌略（青地盈林宗訳・一八二六・地誌、原書は蘭書）

読＝読本

雨月物語（上田秋成・一七六八序）　近世説美少年録（滝沢馬琴・一八一四／三四刊）　椿説弦張弓（滝沢馬琴・一八一八刊）　忠臣水滸伝（山東京伝・〈前編〉一七九九刊、〈後編〉一八〇一刊）　八犬伝＝南総里見八犬伝（滝沢馬琴・一八一四／四二刊）　英草紙（都賀庭鐘・一七四九刊）　春雨物語（上田秋成・一八〇八／〇九成）　本朝酔菩提（山東京伝・一八〇九刊）　弓張月＝椿説弓張月（滝沢馬琴・一八〇七／一二刊）

頼政集（源頼政・一一四四以前・私家集）

夜の寝覚（伝菅原孝標女・一一世紀中・別称「夜半の寝覚」・物語）

蘭東事始（杉田玄白・一八一五・別称「蘭学事始」）

李花集（宗良親王・一四世紀後・私家集）

俚言集覧（太田全斎編・一七七七、〈増補部分〉一八九八・辞書）

霊異記＝日本国現報善悪霊異記（景戒・九世紀前・説話集。訓釈部分はかたかなで示し、〈〇〇本訓釈〉と付記した）

良寛歌（良寛・一八三五編）

梁塵秘抄（後白河法皇編・一一七九・歌謡集）

梁塵秘抄口伝集（後白河法皇・一二世紀後）

令義解（清原夏野ら・八三三・「獲孝令」の官撰注釈書）

令義解（惟宗直本・九世紀中・「養老令」の私撰注釈書）

隣語大方（一八世紀後・朝鮮でつくられた日本語学習書）

林葉集＝林葉和歌集（俊恵・一一七八・私家集）

類聚国史（菅原道真撰・八九二・史書）

類聚名物考（山岡浚明・一八世紀後・類書）

暦象新書（ジョン＝ケール著、ヨアン＝リュフロス訳、志筑忠雄訳・一七九八／一八〇二・天文）

連歌比況集（柴屋軒宗長・一六世紀前・連歌論）

蓮如御文章（蓮如著、円如編・一四九九・消息集）

連理秘抄（二条良基・一三四九奥書・連歌論）

六帖詠草（小沢蘆庵・一八〇四序・歌集）

六条修理大夫集（藤原顕季・一二世紀前・別称「顕季集」・私家集）

六波羅殿御家訓（北条重時・一三世紀中・武家家訓）

六百番陳状（藤原良経ら・一一九三）

六百番歌合（藤原良経ら・一一九三）

ロドリゲス日本大文典（〈ジョアン＝ロドリゲス・一六〇四／〇九・日本語の文法を、ポルトガル語で説いたもの）

論語抄（室町期・抄物）

和歌九品（藤原公任・一一世紀中・別称「九品和歌」・歌学書）

和漢三才図会（寺島良安・一七一二序・百科事典）

和漢朗詠＝和漢朗詠集（藤原公任編・一一世紀中・歌謡集）

和訓栞（谷川士清・一八三〇／六二刊、〈増補〉一八九八刊・辞書）

和玉篇（一五世紀後・辞書）

和名抄＝和名類聚抄（源順・九三四頃・辞書、十巻本と二十巻本とを区別して示す）

わらんべ草（大蔵虎明・一六五一・狂言集）

あ

あ【あ・ア】五十音図の第一行第一段(ア行ア段)に置かれ、五十音順で第一位のかな。いろは順では第三十六位で「て」の次、「さ」の前に位置する。現代標準語の音韻では、五母音の一つaにあたる。後舌の大開き母音。小文字で「つぁ」「ふぁ」のように方言音、外来語音を表わすことがある。「あ」の字形は「安」の草体から、「ア」の字形は「阿」の偏の変化。ローマ字ではaと書く。

あ【足】「あし」のこと。上代には単独形も見られるが、多くは「足卜(あうら)」「足掻(あがき)」「足結(あゆい)」など、複合して使われた。•万葉-三三八七「安(ア)の音せず行かむ駒もが」

あ【畔】「あぜ」のこと。上代、中古の語。•古事記-上「天照大御神の営田(つくだ)の阿(ア)を離ち」

あ【網】「あみ」のこと。主として上代、中古に「網代(あじろ)」「網曳(あびき)」など、複合して使われた。

あ【字音語素】1亞(亜)、亜・啞・堊　2阿、阿・婀・痾　3その他、蛙・鴉

1亞(亜)の類
【亜=亞】㊥ ①第二番目の。次の。/亜卿、亜相、亜聖、亜目、亜流、亜寒帯、亜熱帯/②無機酸で酸素の含まれている割合が少ないこと。/亜硝酸、亜砒酸、亜硫酸/③音字。/亜細亜、亜剌比亜、亜米利加/ ⇩あ(亜)
【啞】おし。/暗啞、聾啞、盲啞/啞然/啞子、啞鈴/
【堊】㊥ 白い土。しっくい。/白堊/ 〔↓アク㊥〕
2阿の類
【阿】①すみ。まがりかど。/曲阿/山阿、水阿/②おもねる。/阿好、阿世、阿附、阿諛/③親しみを表わす接頭語。/阿嬌、阿兄、阿母、阿父、阿Q/④(阿は阿弥陀から)出家した人の名に用いる。/由阿、頓阿/⑤音字。/阿字、阿伽、阿含、阿闍梨、阿修羅、阿鼻、阿片、阿弥陀、阿羅漢、阿弗利加、阿米利加/ ⇩あ(阿)
【痾】病気。/宿痾/ ⇩あ(痾)
【婀】たおやか。/婀嬝、婀娜/
3その他
【蛙】かえる。/井蛙、青蛙、雨蛙/蛙声/蛙鳴蟬騒/
【鴉】からす。/鴉鬢/山鴉、旭鴉、暮鴉/

あ【亜】外国の地域名、国名に用いる音がな。①「アジア(亜細亜)」の略。②「アメリカ(亜米利加)」の略。明治初期の用語。現在は「米(べい)」。③「アルゼンチン(亜爾然丁)」「アラビア(亜剌比亜)」などの略称。⇩あ[字音語素]

あ【阿】①梵字の第一字母を表わす漢字。梵字の音訳。阿字。↓阿吽(あうん)。②「アフリカ(阿弗利加)」の略称。「南阿連邦」など。③阿波(あわ)の国。阿州。⇩あ[字音語素]

あ【痾】病気。特に、長引いて治りにくい病気。「痾を養う」•万葉-巻五「沈痾自哀文」⇩あ[字音語素]

あ【吾・我】【代名】自称。私。あれ。中古以降はもっぱら「が」を伴って連体修飾語となり、親愛感を表わすなど特殊な用法に限定され、また、「わ」が優勢になって衰えた。•古事記-上・歌謡「阿(ア)はもよ女(め)にしあれば」 ―を哭(ね)し泣く(「泣く」は下二段活用の他動詞で、「泣かせる」の意。一説に、下二段活用の自動詞として、「を」は間投助詞とみる) 私を(声を立てて)泣かす。•万葉-三四七一「夢のみにもとな見えつつ安乎禰思奈久流(アヲネシナクル)」

あ【彼】【代名】他称。話し手、聞き手両者から離れた事物を指し示す(遠称)。平安時代以降用いられ、格助詞「の」を伴って連体修飾語となることが多い。あれ。か。→あの。•歌仙本人麿集「梢のみあはと見えつつ」

あ【感動】①驚いたり感動したりした時に発する声。あっ。•今昔-二六・二一「あと許(ばかり)云ふ音(こゑ)有り」②不服の意を示す返事のことば。•虎寛本狂言・末広がり「『あちへうしょ』『ア』」③人に呼び掛ける時のことば。•源平盛衰記-六「主人あといへば、郎等さと出づべき体なり」④人の呼び掛けや、話に答えることば。はい。•古本説話集-六七「ただあと、こたうけをしゐたり」

あ-あ【啞啞】【副】カラスの鳴く声を表わす語。

ああ【副】①あのように。あのとおりに。•滑・浮世風呂-三「ああはいかねへ」②(「ああだ」「ああさ」などの形で)あのよう。あのとおり。•俳・誹讔三十棒「わし等がかけば、ああでは無いて」 ―言えばこう言う いろいろと理屈を並べて、人の意見になかなか従わない。

ああ【嗚呼】【感動】①勝ち誇って笑うとき発する声。あざ笑う声。↓ああしやごしや・ああしやを。②驚き、悲しみ、喜び、疑問などを表わすことば。•源氏-若菜上「耳もおぼおぼしかりければ、ああとかたぶきてゐたり」③相手に不服であることを示す返事のことば。•虎寛本狂言・縄綯「『何の役に立たぬやつの。すっこんで居おろ』『アア』『扨も扨も憎いやつで御ざる』」④相手に呼び掛けるときのことば。•光悦本謡曲・安宅「ああ暫く、あわてて事を為損ずな」⑤相手の話し掛けに対して同意して、気軽に答えるときのことば。『ああ、いいとも』

アー (ドイツ A) ドイツ音名でハ長調音階の第六音。日本音名のイ、イタリア、フランス音名のラ(la)にあたる。

ああ-いう：いふ【連体】あのような。あんな。ああした。非難、からかい、賞賛などの感情が加わることが多い。•滑・浮世風呂-三「ああいふ癖で」

アーカンソー (Arkansas) アメリカ合衆国南部、ミシシッピ川西岸の州。州都リトルロック。一八三六年二五番目の州として編入。

アーク-とう【―灯】(英 arc lamp の訳語) 炭素の電極二つの間に電圧をかけたとき起こる放電による光を用いた電灯。はじめ街路灯、のちには映写機、探照灯、医療用紫外線灯などに使用。初期のものは放電がアーチ型に起こったので arc (弧)の名がある。アークライト。弧光灯。

アーク灯

アーク-ほうでん：ハウデン【―放電】(アークは英 arc) 気体放電の一つ。電流が両極間の気体中を大きな密度で流れ、強い発熱と発光を伴う。アーク灯、アーク溶接、アーク炉などに利用する。電弧。

アーク-ようせつ【―溶接】(アークは英 arc) アーク放電による高熱を利用した溶接法。溶接する金属材料(母材)を溶かして溶接する。電弧溶接。

アークライト (Sir Richard Arkwright サー=リチャード―) イギリスの発明家、実業家。一七六九年、水力を利用した紡績機械を発明。産業革命の先駆者となる。(一七三二～九二)

アーク-ろ【―炉】(アークは英 arc) アーク放電による高熱を利用した電気炉。弧光炉。電弧炉。

アーケード (英 arcade) ①連続したアーチをもつ構造物。大きな建築物のわきの柱に架けたものなど。また、かまぼこ形の天井をもった通路。拱廊(きょうろう)。②屋根のようなおおいを設けた商店街。③商店、飲食店などの並んでいるビル内の通路。

アーサ【ASA】(英 American Standards Association の頭文字)(アサ) フィルム、乾板、印画紙などの感度表示方法の一つ。数値に比例して感度も高くなる。

アーサー-おう：ワウ【―王】(King Arthur) 五世紀から六世紀にかけてのイギリスの伝説的英雄。 ―のし【アーサー王の死】(原題仏 Le morte d'Arthur) 英雄物語。二一巻。トマス=マロリー作。一四八五年発表。当時伝わっていたアーサー王伝説の集大成。

ああ-した【連体】あのような。あんな。ああいう。•洒・一事千金-六「アアしたそぶりは」

ああ-して【副】あのように。あんなふうに。『ああして黙り込むのが気にくわない』

ああ-しやごしや【感動】あざけりわらう気持をこめたはやしことば。ああいい気味だ。上代歌謡に見られる。ああしやを。〔古事記-中・歌謡〕

ああ-しや-を【感動】(「を」は強意の間投助詞)=ああしやごしや〔書紀-神武即位前戊午年・歌謡〕

アース (英 earth 大地、地球の意) 電気回路を銅線などの導体によって大地に結びつけること。また、その装置。異常電圧の発生から機器を保護し、人体への危険を防止する。接地。

アース-ダム (英 earth dam) 土を台形に盛って造ったダム。土ダム。

アーチ (英 arch) ①建築物などで、半円形に弧をえがいた構造。トンネル、橋、建物の入り口などに見られる。迫持(せりもち)。穹窿。②祝賀や歓迎のために設けられる、上部が半円形の門。古くは緑の枝で飾られ、「緑門」ともいわれた。③野球で、ホームランのことをいう。『アーチをかける』

アーチェリー (英 archery) 洋弓。西洋式の弓矢を使うスポーツ。

アーチスト (英 artist「術(わざ)を持った人」の意)(アーティスト) 芸術家。美術家。

アーチ-ダム (英 arch dam) 堤が湖心に向かってアーチ状に張り出したダム。水圧が両岸に伝達されるので、薄い壁で済む。拱(きょう)ダム。

アーチチョーク (英 artichoke) キク科の多年草。高さ約一・五メートル。アザミに似た葉で夏に大きな濃紫色の花をつける。花が開く直前のつぼみをもぎ、肉質部分を食用にする。ちょうせんあざみ。

アーティクル (英 article) ①記事。論説。②項目。条項。

アーティフィシャル【形動】(英 artificial) 人工的。人為的。不自然である。 ―-ライト (英 artificial light) 撮影の際に用いる人工光線。たとえば、ストロボ、閃光電球、写真電球による照明など。

アート (英 art) ①芸術。美術。また、技巧。技術。②「アートし(―紙)」の略。

アート-し【―紙】(英 art paper の訳語) 鉱物性の白い顔料を表面に塗って、つやをだした厚めの印刷用紙。写真版の印刷などに用いる。

アート-シアター (英 art theater) 芸術的、実験的作品を上映する劇場。一九二四年フランスに誕生。

アート-タイトル (英 art title) 映画、テレビで、文字の背景を絵画、写真などで装飾した字幕。

アート-タイプ (英 artotype) 名画の複製などの高級美術印刷に用いる写真製版。コロタイプ。

アート-ディレクター (英 art director) ①映画、演劇などで、美術的効果を指導する者。美術監督。②企業の広告美術などを処理する専門家。

アートマン (サンスクリット ātman) インド哲学用語。聖典リグベーダでは「自分」「身体」「呼吸」の意。次いで人間の「本性」「自我」を、さらに物一般の「本質」をさすようになり、ウパニシャッドに至って宇宙の原理ブラフマン(梵)と同一視された。

アーノルド ㊀(Thomas Arnold トマス―) イギリスの教育者、歴史家。(一七九五～一八四二) ㊁(Matthew Arnold マシュー―) イギリスの批評家、詩人。トマス=アーノルドの長男。主著「批評論集」「教養と無秩序」など。(一八二二～八八) ㊂(Sir Edwin Arnold サー=エドウィン―) イギリスの詩人、ジャーナリスト。著、長編無韻詩「アジアの光」など。(一八三二～一九〇四)

アーバニズム (英 urbanism) 都市的環境でつくり出される人間の行動様式一般をいう。農村的環境と対比したときの用語。都市性。

アービング (Washington Irving ワシントン―) アメリカの作家。主著「スケッチブック」。(一七八三～一八五九)

アアフーメス (Y'h-mś) 前一六世紀中頃のエジプトの王室書記官。イギリスのエジプト学者リンドの発見した数学書「リンド-パピルス」の著者。アーメス。

アーベル (Niels Henrik Abel ニールス=ヘンリク―) ノルウェーの数学者。五次以上の代数方程式が代数的に解き得ないことを証明。また楕円関数論、アーベル関数論を発表した。(一八〇二～二九)

アーベント (ドイツ Abend) 特定のテーマで夕方から開かれる音楽会や講演会。「…のゆうべ」にあたる。

アーマチュア (英 armature)(アマチュア) 電動機の電動子、発電機の発電子の総称。電機子。

アーミー (英 army) ①軍。軍隊。軍勢。②ゴルフで、前半の九ホールの成績によって、ハンディキャップを決めること。 ―-クロス (英 army cloth) 軍用の紡毛織の服地、コート地、毛布など。

アーミュア (英 armure) 畝(うね)模様の変型を織り出した梳毛織物。服地、カーテンなどに使用。

アーミン (英 ermine) イタチ科の動物。体長一八～三〇センチメートル。尾が短く、先端は黒い。夏毛は背面が褐色で腹面は白いが、冬毛は尾の先端を残して白くなる。毛皮は柔らかく光沢があり、きわめて良質で高価。ヨーロッパ、アジア北部、北アメリカに分布。日本には亜種のエゾオコジョとホンドオコジョがすむ。また、その毛皮。

アーム (英 arm) ①腕。多く、他の語と複合して用いる。②(いすの腕かけ、受話器、ミシンの本体など)物を支える腕状のもの。

ああむじょう ああムジャウ【噫無情】ユーゴー著「レーミゼラブル」の黒岩涙香による翻訳題名。明治三五年から同三六年まで「万朝報」に連載。

アームストロング ㊀(Sir William George Armstrong サー=ウイリアム=ジョージ―) イギリスの発明家、企業家。水力機械工場をつくったり、アームストロング砲を発明、世界的な兵器産業をおこした。(一八一〇～一九〇〇) ㊁(Edwin Howard Armstrong エドウィン=ハワード―) アメリカの電気技術者。再生式回路、スーパー(ヘテロダイン方式、F・M方式などを考案し、ラジオ技術、無線通信の発達に大きく寄与した。(一八九〇～一九五四) ㊂(Louis Armstrong ルイ―) アメリカのジャズトランペット奏者、歌手。天才的なソロプレーや独特のスキャットで、エンターテイナーとしても活躍した。愛称サッチモ。(一九〇〇～七一) ―-ほう：ハウ【―砲】(英 Armstrong gun の訳語)(アームストロング砲・アームストロン氏砲) 大砲の一種。アームストロング社製の速射砲、鋼鉄砲。一八五四年、英人ウイリアム=アームストロングが発明したもの。

アーム-チェア (英 armchair) ひじかけいす。

アーム-ホール (英 armhole) 洋服のそでぐり、または、そでつけ。

アームレット (英 armlet) 腕輪。腕飾り。

アーメン ■【感動】(ヘブライ āmēn「まことに」「たしかに」の意。のちに「かくあれ」「そうでありますように」の意)(アメン) キリスト教徒が祈禱、讃美歌などの終わりに唱えることば。■キリスト教やキリスト教徒をひやかしたり、さげすんだりしていう語。

アーモンド (英 almond)(アーマンド) バラ科の落葉果樹。小アジア原産で、高さ六メートルぐらいになる。果実は桃に似るが果肉が薄く水分も少ない。二系統あって、甘いものは種子の仁を食用にし、苦いものは苦扁桃(くへんとう)を含み、神経や咳(せき)を鎮める効果があり、杏仁水(きょうにんすい)をつくる。イタリア、フランス、スペインでは紀元前から栽培されているが、日本へは明治初年に渡来。アメンドウ。巴旦杏(はたんきょう)。『アーモンドケーキ』『アーモンドチョコレート』

ああら【感動】「あら」を強めて、強い感動を表わすことば。•虎寛本狂言・罰罪人「ああらかなしや、是ほど誉り候に、さのみな御責(せめ)候いそ」

アーラニヤカ (サンスクリット Āraṇyaka)(「森林書」の意) 古代インドの聖典ベーダの文献ブラーフマナ(梵書)の最後の章の部分。祭式は神聖なので森林の中で学習すべきものとされたことに由来する名。

アーランガー (Joseph Erlanger ジョゼフ―) アメリカの生理学者。一九四四年、ノーベル生理・医学賞を受賞。(一八七四～一九六五)

アーリア-しょご【―諸語】インド-ヨーロッパ語族のインド-イラン語派の言語の系統。ベンガル語、ビハーリー語、ヒンディー語、グジャラーティー語、マラーティー語などの総称。インドの北部、中部で話される。

アーリア-じん【―人】(アーリアは「高貴」を意味する、サンスクリット ārya に由来) インド-ヨーロッパ語族の諸言語を用いる人種の総称。特に、紀元前二千年紀に北インドに侵入して定着したインド-イラン語派に属する種族をさす場合もある。アーリアン。

アーリー-イングリッシュ (英 early English) イギリスのゴシック初期の建築様式で、盛期は一二世紀末から一三世紀後半。高い尖塔などが特色。ソールズベリ、ウエルズ、ウースターなどの諸聖堂がその例。

アーリマン (Ahriman) ゾロアスター教の神。暗黒、悪の神として、光明、善の神アフラ=マズダに対立するが、敗れる。

アーリントン (Arlington) アメリカ合衆国東部、バージニア州の地名。ポトマック川をへだててワシントンと相対し、国立墓地がある。

アール (英 R, r) 英語のアルファベットの第一八字。①(r) 数学で、半径(radius)、割合、比(ratio)の記号。②(r) 物理学で、「レントゲン(röntgen)」の略。X線の強さを表わす記号の一つ。③(R) 化学で、基(Radical)、とくに水酸基を表わす。④(R) 右(right)を表わす記号。

アール (フランス are) メートル法の面積の単位。おもに土地

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com